図書館だより
HGU Library
library.hgu.jp

vol.225
November 2021

理想の建築とまちづくり

建築と風土、そして創造的感性
工学部建築学科教授 米田 浩志

人の多様性に理想の要をみる
工学部建築学科教授 岡本 浩一

本でめぐる団地
図書館職員 柏尾 文太

本のおかわり『トイレの輪』 佐藤 満春 著

建築と風土、そして創造的感性

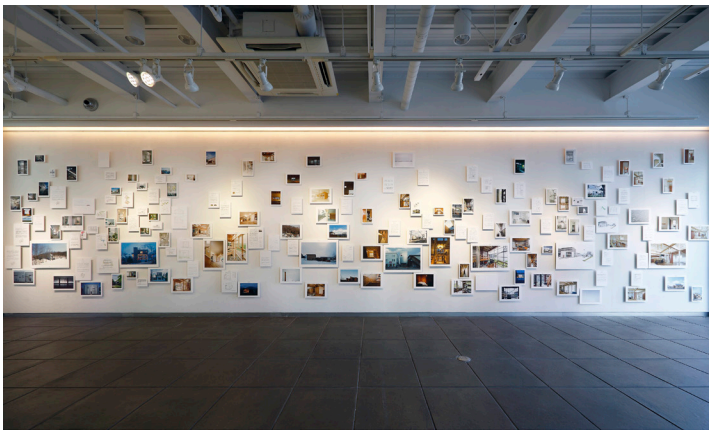
工学部建築学科教授　米田 浩志

建築の理想を求めるために、その目的性を学び、その魅力に惹きつけられながら、多くの建築と出会ってきました。時代や国を越え、人類が創造してきた建築を体感することによって、何か通底するものを再認識させられたような気がします。ここに通底するものは、建築の普遍性と言われているものかもしれません。この普遍性を、いくつかの言葉に置き換えてみると、例えば、「内部空間を形成する建築の小宇宙性」、「人々と共存する建築の有機性」、あるいは、「土地とつながる建築の風土性」などのように表現できます。今回、我々が生活している北海道と関係付けるために、「土地とつながる建築の風土性」に着目し、理想とする建築を書き表してみたいと思います。

建築は、風土と共にあります。したがって、建築を具体化する上で風土に対する認識や解釈はとても重要な観点です。風土に適応した建築は、自然発生的なプロセスから構築されていると言えます。建築史家のクリスチャン・ノルベルグ＝シュルツは、《建築するとは、このゲニウス・ロキを目に見えるように視覚化することであり、建築家の務めは、有意味な場所をつくりだすことにあり、そうすることによって建築家は人間が住まうのを助けるのである。》と記述しています。このゲニウス・ロキは、土地の霊／スピリットを意味しています。このように、風土（土地の霊）が備える特性、そして記憶や歴史の読み取りは、建築において必要不可欠なスタンスです。

風土は、概念だけではなく、身体化することによって理解を深めることができます。その身体化されたものを建築に変換するためには、様々な経験と共に建築家の感性が必要になってきます。感性から生み出されるものは、一義的な建築形式に留まらない多様な拡がりを有する建築を創造します。その多様性が、建築本来の豊かさにつながっていくのではないでしょうか。このような視点から、建築と風土に着目し、北海道における建築形式の可能性について触れてみたいと思います。

建築は、内部と外部を関係付ける空間媒体です。この関係性は気候風土によってバランスが異なります。温暖な地域では、より外部への指向性を有し、内部と外部の等価な扱いが可能です。しかし寒冷な地域では、より内部への指向性を有しているため、内部と外部の等価な扱いはできません。なぜならば、厳しい冬を過ごすためには、雪原の中に佇む家屋（表紙）のように安定的な内部空間が必要だからです。とは言え、内部への指向性が単なるシェルターの形成だけには留まる必要はありません。現在においては、防寒技術も高まり、今までの内部と外部の関係性だけではない新たな空間形式が求められています。但し、この関係において温暖な地域における内部と外部が重なるようなグラデーショナルな空間、いわゆる日本の伝統的な建築が形成する中間領域は、北海道において順化しません。つまり、中間領域化しない空間の二極性が北海道建築のアイディンティティなのです。現在、このような観点から探求される新たな空間形式が北海道建築を進化させています。こ



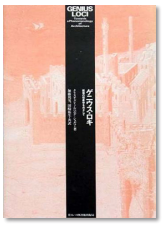
（photo-1）北海道の「感性」が生み出す建築―Architecture created by sensitivity in Hokkaido― 展示風景

の新たな空間形式を北海道建築の第3の空間と称することができます。第3の空間には二つの指向性があります。一つの指向性は、内部における外部性の探求、もう一つの指向性は、外部における内部性の探求です。もちろん二つの指向性が共存することもありえます。この第3の空間は、今後時間と共に創造的な工夫を加えながら風土に定着していくことでしょう。そして、第3の空間を探求する建築家たちのスタンスは、風土を身体化した土着的な意志の表れでもあります。

フランク・ロイド・ライトの弟子、北海道における第一世代の建築家、また本学科の専任教授であった田上義也は、北海道建築の特性に対して《壁は沈黙の森だ—窓は生命の眼球だ。——壁は無—窓は有—この二つのものをバランスせよ。それは静と動の節度ある階調をつくる。》と語っていました。この言葉からは、時を越えて建築空間への深い理解が伝わってきます。すでに、北海道建築の本質を把握していたと言えるでしょう。

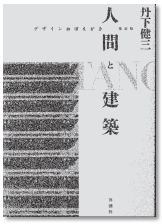
さて、現在も、建築と風土をテーマに掲げ、風土性をどのように建築へと翻訳できるのかが模索され続けています。私は昨年、その風土性を捉える上で建築家の感性に着目し建築展を企画しました。建築展（photo-1）のテーマは、北海道の「感性」が生み出す建築—Architecture created by "sensitivity" in Hokkaido—です。この建築展では、北海道の風土を体感し、そして風土への眼差しから表出される建築家の感性に焦点を当て、そこから創造される建築の志向性を提示しました。建築家の感性を自ら発見することによって、より強固な建築表現が創出されていくはずです。昨今、社会的正義や正論が蔓延する傾向の中、個人の表現が必ずしも重んじられているとは言えません。しかし、建築を創造するためには個人の抽象化過程を必ず経由しなければなりません。その抽象化過程を自覚することによって建築への理解を深めることができるのではないでしょうか。そのためには個人の感性への着目が重要な意味を持ちます。このような観点がもっと共有できれば、即物的な捉え方とは異なる建築へ到達できると思っています。

最後に、この感性に結びついた建築家の言葉を紹介します。日本の代表的建築家・丹下健三は、《美しきもののみ機能的である》、と建築への想いを語りました。この言葉の中にある《美しきもの》は、単に表層的な美醜を表しているのではなく、建築本来の豊かさへの問いかけでした。当時モダニズムの全盛期、その理念として機能主義がありました。人間や生活を標準化し機能というスケールで建築を評価する視点です。機能主義はインターナショナルスタイルとして世界に広まったものの、イデオロギーに盲従し過ぎると、機能によって計量化できないものは排除されることにつながりました。機能主義は合理的な精神から導かれた理念ですが、豊かさは、機能だけで説明できるものだけではありません。ある意味、この《美しきもの》が、より機能的だとも言えます。このような状況下において丹下の言葉は、建築のあるべき姿を問うメッセージでもありました。豊かさへの探求は、現代においても欠かすことができません。昨年来のコロナ禍における様々な影響を含め、社会の寛容性が失われつつある時だからこそ改めて重視すべき姿勢だと思います。前述した《美しきもの》に内包されているのは、人々の自由で創造的な感性です。現在を生きる者たちの感性、そして、特に建築に関わるも者たちの創造的感性には、無限の可能性があります。この感性の存在によって、より豊かな理想の建築が生み出されるに違いありません。



『ゲニウス・ロキ
—建築の現象学をめざして』
クリスチャン・ノルベルグ＝シュルツ 著
（住まいの図書館出版局 1994 年）

『北のまれびと
〈エゾライト・田上義也〉』
小山 一男 著
（現代出版社 1977 年）



『人間と建築
—デザインおぼえがき』
丹下 健三 著
（彰国社 2011 年）

よねた ひろし
1983年東海大学工学部建築学科卒業。吉田研介建築設計室を経て、1988年米田浩志建築研究舎を設立。1993年から本学へ。一級建築士。日本建築家協会会員。日本建築学会会員。主な研究テーマは、「建築表現」の意義とその実践的デザイン手法に関する研究。第17回北海道建築奨励賞受賞。代表作品に「BRACE」「MARCHE」「FB WALL 2」「FB WALL 3/M」「FB WALL 5」「FB WALL 6」、500m美術館 Sapporo Section：Architecture「美術と建築、これからの札幌」展出展など。

人の多様性に理想の要をみる

工学部建築学科教授　岡本 浩一

建築もまちも人があってこそ

人が使っていない建築はすぐに傷むと言われます。人がいなくなると、風通しがなくなり、扉や窓も動かされず、歩き回られることもなく、物理的な変化や刺激が失われます。その傷みは、人との関わりのなかで生じる傷みではなく、人との関わりが失われて蝕まれる傷みです。前者は大切な想い出になったりもします。しかし、後者には寂しさと悲しさが刻まれるのでしょう。人に使われなくなり傷んでしまった建築は廃屋と呼ばれ、気味悪がられることさえあります。人がいなくなったまちはゴーストタウンあるいは廃墟と呼ばれ、人との関わりが失われることで蝕まれて傷みます。小説や映画のなかでは、底知れない静寂と悲しみに満ちた舞台として描かれることが多いように思います。建築もまちも、そこに人があってこその存在であることは間違いありません。

建築やまちはカタチが主役？

建築もまちも、人と関わるなんらかの目的を持って計画・設計されます。

大昔には、雨風や強い日差しなどから家族あるいは食料等を守るため、身のまわりにあるものを道具にも建材にも仕立てて、屋根や壁や出入口を用意し外部との境界を形作ったのでしょう。人が集まってまちを形成するようになると、時代の流れとともに目的も変化し、建築もまちも様々に姿を変えてきています。

目的の代表的なものには、戦と防衛や権力の誇示による人々の統治、宗教・思想信条の啓蒙や共有、伝染病や自然災害といった多くの命が一遍に失われる危機の回避、そしてもちろん安心安全で健康に快適に生きていけることなどが挙げられるでしょう。このことから、建築もまちも単にカタチをデザインしているのではないことがわかります。目的の核心には人が必ず存在し関係します。

例えば、感動するほど美しい建築は、そう感じさせる〝芸術性〟を帯びていますが、人が自己に内在する何かを表現して生み出す〝芸術作品〟と同義ではありません。建築は、床が水平でなくては居られません、光や明るさを操作します、外ではありません、出入りができます、その上で〝芸術性〟を纏います。また、気候風土や物理現象を読み解いたり、思想や哲学を語ったり、高尚な言説を披露したり、専門家の間で持て囃され、一般の人から尊敬される心地よい感覚も、創造意欲には不可欠でしょう。ただ間違いないのは、建築もまちも人と関わってはじめて、存在する意味や価値を得られるということです。美しさに感動するのも、日々を暮らすのも、想い出を紡ぐのも、愛着を感じるのも、その主役は人なのです。

人の1文字に無数の多様性

ところで、2020東京オリンピック・パラリンピックが終わってしばらく経ちました。コロナ禍のためアスリートの雄姿を目のあたりにはできませんでしたが、中継映像でさえ何度も心を動かされました。とりわけ大きかったのは、人の多様性について改めて考える機会になったことです。

「建築もまちも人があってこそ」と言いながら、人の持つこれほどの多様性を意識してきたかと問われると答えに窮します。前職で都市計画やまちづくりの実務に携わるなか、住民参加ワークショップで地域の方々と対話したり、まちづくり活動にボランティア参加したりしました。現在も研究室の学生たちと幾つかの地域で、夏祭りを手伝ったり、空き家をリノベーションしたり、数年に渡り継続的に取り組んでいます。本当にいろいろな人たちと関われる貴重な機会と経験です。ただ、出会ってきた人々の多様性は限定的なのだと気がつきました。人は1文字ですが無数の多様性を含むもので、広く捉える姿勢を意識的に持ち続けなくてはならないと感じています。

人の多様性を意識するには

都市計画の専門家として、幾つかの自治体で計画の策定や民間提案の審査などに関わる場面があ

ります。私のこれまでを振り返ると、人の存在との向き合い方は常に意識して発言してきましたが、人の多様性への意識はあまりなかったと思います。同時に、人の多様性に重きをおいて建築やまちを提案願う条件の設定や、提案そのものも少なかったように思います。建築やまちのなかを動き回る人々を、点のごとく捉えた風情の計画や提案にはひどく憤りを感じたものです。しかし、人の多様性まで思い巡らした憤りではありませんでした。

まちの計画やまちなかにある建築の設計では、不特定多数の人々を想定して検討を進めます。計画・設計する人たちには、そこで過ごす人を他人と想定する傾向が見られます。完成後には自分や家族も含めて訪れたり使ったりする場でさえ、どうしたものか、計画・設計する立場になると自分も家族もその場にはいない感覚で仕事を進められるのです。仕事の範疇では、基準やルールを守って組み立てるパズルに挑む感覚に近いのかも知れず、寂しさと違和感を抱くことがあります。まずは自分や家族や身近な人がその場で過ごす様を思い描くだけでも、人の多様性に寄り添う計画・設計へ近づくと思います。

人の多様性を受けとめるデザイン

人の多様性を受けとめて計画・設計を進める鍵のひとつに、インクルーシブデザインがあります。利用することになる多様な人たちを巻き込んで、計画・設計の初期段階から参加してもらい、日々の実情や実感を直接聞きながらデザインする手法です。新国立競技場で実践され注目を集めています。考えるべきことや配慮を要することが一段と増えて、空間を創造する自由さが減るようにも思えます。しかし、計画・設計する人たちの視野を劇的に広げ、創造の意欲を大いに刺激する効果が期待できます。

建築やまちの計画・設計は、多くの先人達が研究を重ねて整理した基準やルールを守って進められます。基準やルールは数値で表現されるものも多く、適不適の判断は容易です。しかし、それらを決めた根拠に含まれる実情や実感、数値に落とし込んだプロセスまでは詳しく書かれていません。インクルーシブデザインでは、建築やまちの計画・設計において人の多様性を受けとめるべく、現実味のある手がかりを当初から得られます。ただし実現事例が増えると、数値での表現に馴染むものは追加され、実情や実感が再び見えなくなる可能性もあります。他方、馴染まないものも多くあるはずで、インクルーシブデザインの思想と仕掛けの継承が大切になります。一時の流行に終わらせず、人の多様性を受けとめる計画・設計を常とし、あらゆる人に愛される建築やまちが実現することが理想です。

おかもとこういち
北海道大学大学院工学研究科 都市環境工学専攻博士後期課程修了。博士（工学）（北海道大学）。専門は都市計画、住環境計画。主な研究テーマは、持続可能で豊かな暮らしを実現するために必要なビジョン・プロセス・マネジメントそれぞれのあり方。

おすすめの本

『宮脇檀　旅の手帖』
宮脇 檀 著 / 宮脇 彩 編
（彰国社 2008 年）

『地域を変えるデザイン
―コミュニティが元気になる30のアイデア』
筧 裕介 監修 / issue+design project 著
（英治出版 2011 年）

『小樽志民 運河保存運動の市民力』
石井 伸和 著
（社会評論社 2018 年）

本でめぐる団地

図書館職員　柏尾 文太

札幌の狸小路六丁目にある映画館シアターキノで、団地を舞台にした映画を観た。濱田岳主演の『**みなさん、さようなら**』。原作は、久保寺健彦の同タイトルの小説だ。

主人公は小学校を卒業後、中学校には行かず、一生、団地の中だけで生きていくことを決意する。団地の中には友達がいて、賑わいのある商店街があって、日課であるトレーニングのできる公園があって、自分の部屋で勉強もして、そこだけで生活は完結する。中学校の教師は登校するよう説得するが、彼は頑として聞かず、母親も彼を後押しする。そして、彼は一日も登校しないまま中学校を卒業し、団地から一歩も外に出ることなく、就職して、恋愛もして、婚約までしてしまう。彼には団地から出られない〝深い理由〟があるのだが、それはともかく、彼にとって団地はまさに〝理想のまち〟なのだ。

映画のパンフレットには、団地マニアの写真家でライターでもある大山顕のエッセイが寄稿されている。そこには、マンションと団地の違いについて、こう述べられている。「マンションは商品で、団地はインフラです」と。つまり、団地は道路、橋、上下水道などと同じように、我々の生活において欠かすことのできない社会基盤なのだ。

■　■　■

ここで言う団地とは、日本住宅公団（現在の都市再生機構＝UR）や地方自治体、地方住宅供給公社などによって建設された公的な集合住宅を指すが、その源流は、大正から昭和初期にかけて、東京や横浜で建設された「同潤会アパートメント」と言われている。これは関東大震災の復興を目的として建設された集合住宅で、耐震・耐火のため、それまでほとんど例を見なかった鉄筋コンクリートによって造られた。電気、ガス、水道、水洗トイレ、エレベーターなど、当時としては最先端のモダンな設備が整えられ、食堂、娯楽室、音楽室、社交室など、何ともハイカラな共同施設を備えるアパートも存在した。

松葉一清著『**集合住宅―二〇世紀のユートピア**』では、集合住宅にユートピアを求めているが、著者は明治から敗戦までの間において、日本でユートピアを志向した集合住宅の稀有な例として、同潤会アパートメントを取り上げている。鉄筋コンクリート造の〝先輩格〟である「軍艦島」との対照も興味深い。

橋本文隆ほか編『**消えゆく同潤会アパートメント―同潤会が描いた都市の住まい・江戸川アパートメント**』では、同潤会の集大成として建設され、「東洋一」と謳われた江戸川アパートメントが、当時の貴重な資料や写真により鮮やかに蘇っている。建物の配置をはじめ、外観から建具のひとつに至るまで意匠が凝らされており、何とも美しい建築である。

■　■　■

敗戦後、焦土への復員・引き揚げ、そしてベビーブーム。日本は慢性的な住宅不足に陥る。その問題を解決するため、一九五五年に国の政策として設立されたのが日本住宅公団である。現在において当たり前の生活様式は、団地から普及したものも多い。初期の団地の代表的な間取りは2DKであるが、このDK＝ダイニングキッチンにより「食寝分離」（食べる場所と寝る場所を分けること）が可能となった。ダイニングテーブル、ステンレス流し台、シリンダー錠が備え付けられ、冷蔵庫や洗濯機をはじめとする家電製品の普及率も高く、洋風の生活を送る団地住民は「団地族」と呼ばれ、世間から羨望の眼差しで見られた。

青木俊也著『**再現・昭和30年代　団地2DKの暮らし**』では、日本住宅公団が千葉県松戸市に建設した常盤平団地をモデルとして、当時の団地における暮らしが再現されている。ある家庭で撮り続けられた家族写真からは、時の流れとともに変化していく暮らしが記録されており、特に子どもの成長とともに移りゆく住まい方の変遷は貴重な記録である。

篠沢健太・吉永健一著『**団地図解―地形・造成・ランドスケープ・住棟・間取りから読み解く設計思考**』は、造園家と建築家による団地設計の解説書だ。全体の地形から個々の間取りに至るまで、団地の住環境にはすべて設計者の緻密な意図がある。団地は「画一的」と揶揄されるが、実際には様々なバリエーションがあり、そこには設計者の矜持と執念が見て取れる。

■　■　■

高度成長期、農村から都市へ急激に人口が移動する。その結果、都市は無秩序・無計画に郊外へと広がり、インフラ整備の遅れなど、様々な弊害が露呈する（スプロール現象）。それを是正するため、計画的に郊外で開発された都市がニュータウンである。その代表格である大阪の千里ニュー

タウンや東京の多摩ニュータウンは、言わば〝団地の集合体〟だ。

金子淳著『**ニュータウンの社会史**』では、多摩ニュータウンを中心に、その軌跡をたどり、地域社会の変貌が描かれている。開発前後の連続性への着目は、「ニュータウンは人工都市である」という定説に対するアンチテーゼである。

このように、団地やニュータウンについては、建築学にとどまらず、様々な分野から研究が行われている。

原武史著『**団地の空間政治学**』は、政治思想史からの団地研究である。一九六〇～七〇年代の団地内部における政治性、すなわち自治会などの「居住地組織」を通じて広がる住民の革新的な政治意識、そして団地と社会主義との親和性が浮き彫りにされている。

今井瞳良著『**団地映画論―居住空間イメージの戦後史**』は、映画論からの団地研究だ。「団地族」から「団地妻」、そして「ノスタルジア」に至るまでの、戦後の団地映画が描いてきた団地のイメージとその批評性を通じて、「住むこと」の変遷が描かれている。

■　■　■

高度成長の終焉とともに、住宅に対する需要は〝量〟から〝質〟へと変化する。しかし、時代がかわっても、団地の中は昭和のままだ。やがて人も老い、建物も老い、まちも老いてゆく。近年の団地が抱えている問題は、空き家や建て替え、そして住民の高齢化や外国人居住者の増加だ。

大山眞人著『**団地が死んでいく**』は、団地と孤独死がテーマである。特に、住民が建て替えを拒否した常盤平団地で行われている孤独死予防の取り組みは、注目に値する。

安田浩一著『**団地と移民―課題最先端「空間」の闘い**』は、団地と外国人居住者がテーマだ。言語や文化の違いを乗り越え、同じ居住者として日本人と外国人を繋ぐ取り組みには、学ぶことが多い。

老朽化した団地を建て替えず、既存の建築ストックを活用して再生する取り組みも注目されている。青木茂著『**団地をリファイニングしよう。**』では設計者側の視点から、アトリエコチ著『**団地リノベ暮らし**』では居住者側の視点から、それぞれ生まれ変わった〝DANCHI〟の姿が紹介されている。

■　■　■

社会の要請に応じて建設された団地は、常に時代の最先端だ。かつて憧れの的だったライフスタイルも、現在抱えている諸問題も。団地の歴史をたどれば、日本の歴史が見えてくる。団地が抱えている問題を克服できれば、日本が抱えている問題を解決する糸口が見えてくる。団地は日本社会の縮図なのだ。

『みなさん、さようなら』
久保寺 健彦 著
（幻冬舎文庫 2010 年）

『集合住宅
―二〇世紀のユートピア』
松葉 一清 著
（ちくま新書 2016 年）

『消えゆく同潤会アパートメント―同潤会が描いた都市の住まい・江戸川アパートメント（新装版）』
橋本 文隆・内田 青蔵・大月 敏雄 編、兼平 雄樹 写真
（河出書房新社 2011 年）

『再現・昭和 30 年代
団地２ＤＫの暮らし』
青木 俊也 著
（河出書房新社 2001 年）

『団地図解―地形・造成・ランドスケープ・住棟・間取りから読み解く設計思考』
篠沢 健太・吉永 健一 著
（学芸出版社 2017 年）

『ニュータウンの社会史』
金子 淳 著
（青弓社 2017 年）

『団地の空間政治学』
原 武史 著
（ＮＨＫ出版 2012 年）

『団地映画論
―居住空間イメージの戦後史』
今井 瞳良 著
（水声社 2021 年）

『団地が死んでいく』
大山 眞人 著
（平凡社新書 2008 年）

『団地と移民
―課題最先端「空間」の闘い』
安田 浩一 著
（ＫＡＤＯＫＡＷＡ 2019 年）

『団地をリファイニングしよう。』
青木 茂 著
（建築資料研究社 2011 年）

『団地リノベ暮らし』
アトリエコチ 著
（アスペクト 2013 年）

◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 本のおかわり

佐藤 満春 著

『トイレの輪』

（集英社文庫 2020 年）

文＝前田 将司　図書館職員

今の家に住み始めて四年目になる。一人暮らしのため、全て自由だ。食器を洗い場に溜め込んでもいいし、好きなだけ趣味にも没頭できる。必要以上にトイレに篭ってもいい。家の中での悩みはほぼない。強いて言うならば、ガス代が少し高いのと、必要以上に過ごしてしまうトイレの温水洗浄便座がズレていることだ。入居時から建て付けが怪しかったのか、終電で帰宅したはずなのに、気付いたらトイレで朝を迎えていたあの時なのか、原因はわからない。毎回、便座のズレを直してから安心する時間を過ごしている。

本書はそんなトイレについて、お笑い芸人をやりながら、「トイレをもっと楽しく」をテーマにトイレの啓蒙活動を行なっている著者と、トイレ好きな人々、トイレ業界に関わる人々との対談が六回分収録されている。世界や日本のトイレの実情、社会構造物やアートとしてのトイレの視点、胸に迫るものがあるトイレの失敗談までと、「トイレ」の現在地に触れることができる入門書だ。

日本の大手トイレメーカーであるＴＯＴＯ、ＬＩＸＩＬ、パナソニックの座談会の回は、三社三様の取り組みを知ることができるが、三社に共通していることは、「トイレを『キレイ』に使用できる環境をどれだけ保ち続けられるか」を追い求めている点だ。

ＴＯＴＯは、特許取得済みの汚れを落ち易くする陶器表面への加工技術のほか、便座ノズルと便器を除菌する除菌水の生成技術が目を引く。洗剤や薬品は不要で、ＵＳＢメモリほどの電解ユニットで水道水を電気分解して次亜塩素酸を含む水を生成する。これは、哺乳瓶を消毒する際の除菌水と同様の成分で、時間が経てば水に戻る。キッチンや浴室などの水回り製品にも技術展開されており、水にフォーカスした「キレイ」への想いが感じられる。

ＬＩＸＩＬは、二〇一〇年代に国内の建材・設備機器メーカー五社が統合した企業で、前身の伊奈製陶・ＩＮＡＸ時代からの歴史ある製陶技術を一から見直し、陶器素材の悩みでもあった水アカが付きにくい素材を配合した陶器を開発した。中性洗剤で強い力を加える事なく、簡単に汚れと水アカ掃除ができるということで、掃除の時間が軽減されるのは魅力的だ。従来の陶器の頑丈さと、最新の防汚性能が組み合わさった新しい陶器のキャッチフレーズは、「１００年クリーン」。蓄積された技術がありながらも、次のステップへ挑戦したＬＩＸＩＬの輝きにぴったりだ。

パナソニックは、陶器製の便器ではなく、加工がしやすく電気系統とも相性が良い樹脂系素材を用いて便器を生成している。掃除の際に手が届きやすいよう、スキマや凸凹が少ない形状の設計や、中性洗剤を格納するポケットを作り、便器内の水を泡立たせる機能などを搭載している。掃除の通知や使用状況を確認できるアプリと連携することもでき、ＩｏＴトイレとして電機メーカーの強みを存分に活かしている。いずれ、トイレで寝ていたら起こしてくれる機能も搭載されるかもしれない。

本書を読み終えた後はトイレへの興味の幅が広くなった。世界のトイレ問題へのプロジェクトで自分にできることをやってみたり、災害時のトイレ対策を調べたりしたほか、日々のトイレではメーカーを確認するようになった。病院で最新のトイレに出会ったときは、最新の機能を見ることができて心の声が上がった。

確実にトイレの見方は変わり、トイレ文化は発展しつづける。そんな明るいトイレの未来や欲しいトイレを想像しつつ、ズレたままの家の便座、そろそろ管理会社に相談しなければ。

北海学園大学附属図書館報　図書館だより

2021年11月15日発行　第43巻2号（通巻225号）

編集・発行 / 北海学園大学附属図書館

062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40　Tel 011-841-1161

http://library.hgu.jp

表紙写真：米田浩志教授提供